

沼津市若山牧水記念館

第69号 令和4年9月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>



石こゆる水のまろみを眺めつ、
こゝろかなしも秋の溪間に 牧水

牧水は、大正六年十一月十二日に急に思い立って秩父の溪谷に四日間ほど遊び、感興の趣くままに短歌を詠んだ。その短歌を『文章世界』の大正七年一月号に「溪百首」と題して発表し、第十二歌集『溪谷集』に「秩父の秋」九十六首を収録した。そのうちの一首が「石こゆる……」である。牧水は、秩父の溪谷を訪れたときのことを、『創作』大正六年十二月号の「編輯所便」に次のように書いている。

先日珍しく長雨の晴れた時、ふいと思ひ立つて昼過ぎに家を出て数日間近所を歩いて来た。一晚泊り位ものつもりが段々深入りして、たうとう秩父の方まで入り込んで行つた。そしてまた風邪を引き込んで帰つて来た。今号の編輯は殆んど寝ながらの仕事である。秩父の溪と黄葉は実に意想外であつた。だんだん奥に行けば行くほど好くなる溪を見すてて帰つて来るのはほんとにつらかつた。幸ひにその間よく晴れて呉れた。歌も出来た。文章世界の新年号分として百首だけ書き抜いて送つておいた。就て見てほしい。

大正六年の牧水は、二月にのちに第三次「創作」といわれる『創作』第五卷第一号を発行し、二月末に『和歌講話』を天弦堂書房から刊行。四月に故郷から母マキが上京して一ヶ月ほど滞在した。四月下旬に『わが愛誦歌』を東雲堂書店から出版。五月九日に小石川区金富町から市外巢鴨町に転居。六月に妙義山に出かけ、八月には秋田、新庄、酒田、新潟、長野を回り、結婚してから初めて妻喜志子の広丘村吉田の実家を訪ねた。その旅行中に喜志子との合著『白梅集』を抒情詩社から出版。十一月に秩父に遊び、二週間位あけてから、千葉県大原海岸を旅して、『溪谷集』に収められた「上総の海」五十五首を詠んでいる。実に精力的な活動である。

なお、「石こゆる……」について、牧水の高弟大悟法利雄は、『若山牧水の秀歌』で次のように解説している。

作者はただひとり、静かな秋の溪間にたたずんでいる。もちろん附近には他の人影などはまったくなく、小鳥の声とてもきこえてはいないであろう。ただただ静かな谷の流れ、冷たい水の光、もしも木の間を漏れて射す日かげがあるならば、それもうららかに澄みとおっているであろう。すぐ目の前の流れの中に石の頭があつてそれを越えてゆく水が次々につくるなめらかな丸いふくらみ、それにじいっと見入りながら、旅人の心は珠のような悲哀に澄んでいるのである。一首の姿がまことに静かに澄み、用語が実によく洗練され、その声調もまたまことに美しく澄み、それこそ珠玉のような作品である。

牧水の「うたげ」の心 小島なお

私にとって若山牧水というひとはずっと捉えどころのない歌人だった。牧水の名前を言うときにまっさきに思い出される青春期の、純朴でストレートな抒情は、胸を鋭く突くものではなく、野球でいえばフライの球のようにその飛距離の高さ、テンションの高さに圧倒されて仰ぎつつ茫然とってしまうような遙かなものだった。

なぜ私たちは詠うのか。それは孤りだから。どんなに楽しい事柄を、どんなに面白い事柄を詠っていたとしても、その芯に寂しさがある。何かがあつて寂しいのではなく、今を生きていること、理由のない根源的な寂しさのことだ。

幾山河越えさり行かは寂しさの終てなむ
国ぞ今日も旅ゆく 若山牧水『海の声』

こうした作品を読むと牧水は寂しさに生涯貫かれたひととも思える。お金がなくとも家族と離れてでも、旅へあこがれやまないひとだった。けれど、不思議なことに「寂しい」と言葉では言いながら、作品の世界はかえっ

て向日性を持って、はるかな場所へ展いてゆく印象を纏っている。
たとえば「君」との関係を詠んだ作品で、
牧水と著名な現代短歌とを比較してみる。

◇私と君

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君 若山牧水『海の声』
君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられなばいかにしたまふ
短かりし一夜なりしか長かりし一夜なりしか先づ君よいへ

*

君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ 北原白秋『桐の花』
たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

河野裕子『森のやうに獣のやうに』
観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生 栗木京子『水惑星』

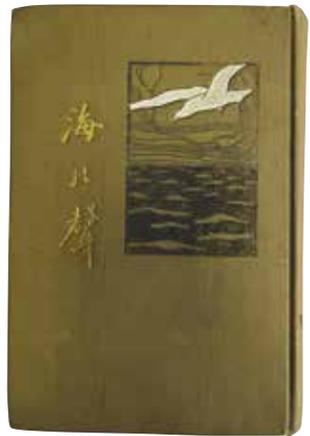
牧水の一首目は三度もの呼びかけもさるこ

とながら結句「いざ唇を君」のインパクトだろう。牧水と同じ明治十八年生まれ、白秋の歌と比べればその特色はいっそう際だって見える。「いちばん言いたいことは言わない」という作歌のセオリーを無視した直球の欲望がかえって深い。もしも海に求婚されたら、という二首目、自分への思いを「君」に確かめる三首目。河野の歌は、仮定法が用いられている点、栗木の歌は恋の時間の長さで短さという点において牧水の歌と共通項がある。

しかし、牧水の歌と比較して顕著に違うのは、君を思う心のベクトルがどちらを向いているか、という点だ。一見、大胆に詠われる牧水の歌において、肝心な答えの部分は「いざ」「いかに」「いへ」と三首とも「君」に託されている。ナイーブに詠われる後半三首では心理は内向的で、自分自身で完結し閉じている。河野の作品は相手に託しているようにも見えけるけれど、牧水と歌と比べると、願いが叶わないものであることをあらかじめ知っている感じがする。

ここで演題の「うたげ」についてすこし。

この言葉は三島出身の大岡信氏の評論「うたげと孤心」から引いた。いずれも創作に必要な力を指すもので、「うたげ」は歌合や連歌など心を他者と交え、合わせる場を共有する力。



第1歌集『海の声』

「孤心」は孤独の心を研ぎ澄まし深める力。どちらが欠けてもだめで、二者の引き合うところこそ一級の作品が生れるものであると昔から歌人たちは〈公の私〉と〈孤の私〉を使い分けてきた。

◇〈公の私〉と〈孤の私〉

うらうらに照れる春日にひばり上り心悲しもひとりし思へば 大伴家持『万葉集』
あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し 夜をひとりかも寝む 柿本人麻呂『万葉集』
家にある櫃に鏤刺し蔵めてし恋の奴がつかみかかりて 穂積皇子『万葉集』

一首目は、家持の最高傑作と評される春愁三首のうちのひとつ。うららかな春の景色に同化できず、自分ひとりだけがそこから疎外されてしまったような悲しみが、さわやかに

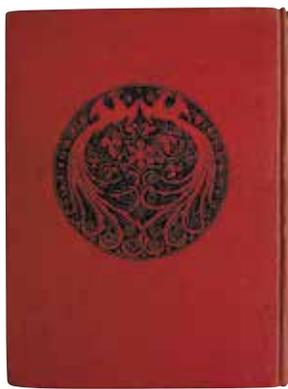
映し出されている。「心悲しも」の内実は示されていない。「うらがなし」という漠然とした気分だけが読者に共有される。場面なり出来事なり、なにかしらの契機によって導き出されたものではなく、心の深部からおのずと滲んでくる気分自体が一首の契機になっている。その捉えどころのない悲しみこそ〈孤の私〉の心の感受と捉えてみたい。

百人一首でも有名な柿本人麻呂の二首目。カルタなどでよく耳にすることから、あまり深く考えずに覚えている一首だけれど、あらためて見てみるとやや変わった着想に感じられる。「山鳥の尾のしだり尾」の長さ、秋の夜の時間の長さ。長さの質がまったく異なる。自分が作者の立場だったとして、(ひとりの夜は長いなあ)↓(山鳥の尾羽くらい長いなあ)と果たして発想するだろうか。比喩としては二回転半くらいひねりがある感じ。もしかして発想の順番が逆なのではないか。私たちは近代以降の基盤の上で短歌を作っているの、どうしても実際に見たこと、感じたことを起点として解釈してしまいがちになる。しかしこの歌が万葉集では「鳥に寄せる歌」の歌群に属する寄物陳思、題詠であることを踏まえれば、尾の長い山鳥がまずあって、そこから「長いもの」という連想で秋の夜の一人寝が

引き出されてきた可能性が大きい。うっかり作者固有の感情を見いだしそうになるけれど、これは〈公の私〉の孤独だと言えそう。三首目の穂積皇子の歌意は、「家にある櫃(蓋が上に開く大型の箱)に鍵をかけてしまい込んでおいた恋の奴めが、つかみかかってきて」。この歌には左注があり「穂積皇子が宴会の日、酒盛りがたけなわになった時に、よくこの歌を吟誦してもてあそびの種とされた」とのこと。宴会における穂積皇子の十



第14歌集『山櫻の歌』



第7歌集『秋風の歌』

八番の歌。「恋の奴」が「頭をもたげる」でもなく「忍び寄る」でもなく「つかみかかりて」くるのだから、相当なこと。鍵を掛けてあったのはどうしたのだろうか。この歌が「もてあそびの種」となったのは、内容がただ面白いというだけではない。穂積皇子は昔、時の太政大臣で義兄である高市皇子の妻妾、但馬皇女との不倫が発覚して世間を騒がせていたのだ。その事件を思い起こさせるからこそ、宴会はおおいに湧いたはず。もう時効だよね、と開き直りつつ、かすかに切ない思いを胸に抱く穂積皇子を想像してしまう。そしてここでは〈孤の私〉と〈公の私〉が混じり合いながらも、やや〈公の私〉寄りの心に思える。

◇旅という〈うたげ〉

けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつかくがれて行く若山牧水『海の声』
先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死なむと教ふるならめ 『山桜の歌』
友が守る灯台はあはれわだ中の蟹めく岩に白く立ち居り 『秋風の歌』

牧水は四十三年の決して長くない生涯で、数え切れない旅に出て、多くの作品を残した。その数は全作品のうち三分の一ほどを占めるという。『みなかみ紀行』を読んでいてまず驚

くのは同行者の多さである。牧水の動向を聞きつけた同人たちが入れ替わり立ち替わり宿泊先を訪れて、飲み明かし、離れがたくてそのまま連れになつてゆく。のみならず、行く先々で牧水らしい人懐こさを発揮して、初対面のひとたちともまるで旧友のように長い時間を共にする。

二首目は、『みなかみ紀行』にも収載されている、群馬県奥の山奥の引沼村というところでの作。旅でなければおそらく出会うことのないひとの小さく、かけがえない生涯。こうした無名の人々の姿を牧水は大切にまなざしのなかに留めてゆく。

下田市恵比須島の歌碑にもなった三首目。牧水は、神子元島の灯台守である大学時代の学友・古賀安治を訪ねるために渡島し、一週間滞在した。のちにその体験は、八十一首の大作となつて歌集『秋風の歌』に収められている。

歌人の旅というと、なんとなく一人きりの創作の旅を想像してしまうけれど、牧水のそれはずいぶん異なる。親しい人も親しくない人も、旅という河のような時間の流れに引き入れて、別れたあとも牧水の時間の続きにあつて、ゆたかに心を太らせる存在になる。「このころの鉦」はたった一人の鉦ではなく、これ

までに会った人、これから会う人のこのころの鉦と、ひびきながら共鳴しているのかもしれない。

寂しさを言いながらも、牧水の多くの旅の歌にあかろく、たくましい光が当たっているように思えるのは、旅が心と場を他者と共有する〈うたげ〉の時間であつたからではないだろうか。近代以降、〈孤〉の表現は深く、多様に耕されてきた一方、場の減少とともに〈うたげ〉の土壌を失いつつある。今の私たちがら見て牧水の作品が不思議で稀有なひかりを放っているのは、〈うたげ〉の心の力ゆえなのかもしれない。

「筆者プロフィール」 こじま なお



昭和六十一年、東京生れ。コスモス短歌会所属。同人誌『○○○○』編集委員。平成十六年、「乱反射」五十首で、第五十回角川短歌賞受賞。第一歌集『乱反射』で、第八回現代短歌新人賞、第十回駿河梅花文学賞をそれぞれ受賞。その他の歌集に『サリンジャーは死んでしまった』、『展開図』。他に千葉聡との共著で『短歌部、たたいま部員募集中!』がある。日本女子大学講師。令和四年三月十二日に開催した第三十四回「難

の歌会」に、講師としてお越しいただいた。